

「下宿」という名の大学



大隈講堂から南に少し歩くと坂道がある。通称夏目坂通り。この辺一帯の名主だった漱石の父直克が名づけた。登りきると二手に分かれる。右は東京女子医大方面。左の神楽坂方面をちよつと進むと喜久井町。漱石はこの地で生まれた。新宿区喜久井町34。ここが我が下宿。3畳一間の部屋が1・2階に4つずつ。

1968年4月。下宿の一員となる。親分は伊藤一長さん。長崎市出身の政経学部5年生。180を超える身長。すきとした面長の顔。7・3に整えた髪。美男だ。仕送りはなく、働きながら学んでいた。さあ歓迎会。親分の号令一下、8人が車座になる。出身は、福島県西白河郡表郷村。分かんなくエ：奥州白河の関の近くです。東北か、遠いな（エツ、長崎はなお遠いのに）。やはり訛っているな（自分も九州弁丸出しなのに）。まず飲め。目の前にはなみなみと注がれたどんぶり酒。目をつむって一気に流しこんだ。頭はグラグラ。よし、何か歌え！深夜放送で聞いていた『ラブユー東京』を披露。その後のことは覚えていない。翌朝は人生初めての二日酔いだっただ。

よく酒盛りをした。マルクス、ウェーバー、丸山真男……。難しい言葉が飛びかう。当時、東大・日大紛争を契機に学生運動が燃え盛っていた。親分は「インターン制度を廃止しない東大医学部や巨額の使途不明金を隠蔽していた日大への反発は当然。問題は、大した信念もなく騒いでいる連中だ」。苦学生の目には茶番としか映らなかつたのだろう。

「俺は保守主義者だ。一挙に社会が変わることはないぞ。仏革命も頓挫した。ソ連も長くは持たないだろう」左翼的雰囲気支配する中、超然としていた。

さらに「なあみんな、長崎原爆の悲惨さが分かるか。一瞬にして8万人の命が奪われ、今も後遺症に苦しむ人がいるんだ。何故、原爆投下の前に戦争を止めなかつたのか」。その目には涙が光っていた。「俺は政治家になる！一生貧乏だろうが『低く暮らし高く思う』だよ」

二人で銭湯の一番風呂につかつた。親分は人使いがうまい。「銭湯には映画のポスターが張つてあるだろう。ここには招待券があるんだ。幸い今日の番台はオバさんじゃない。あの姉ちゃんからもらつてこい」恐る恐る「あの：映画の券つてあるんですか？」集団就職で来たのだからか。新潟出の赤い頬っぺの女性は、恥ずかし気にそつと渡してくれた。うまくいったな！親分はニヤニヤしていた。

同年12月10日、新宿行きの都電の駅に向かつた。途中雨が落ちてきた。折良くタクシーがきた。ラジオから臨時ニュースが流れてきた。先ほど府中刑務所の前で強奪事件発生。三億円事件だった。映画はカミュ原作の『異邦人』。人間の欺瞞と不条理を描く名作との触れこみだが、半分も理解できなかった。「先輩分かりましたか」分かんなく、だが感じればいんだ！「コマ劇場近くの食堂のビールとカツカレーは、実においしかった。

親分は長崎に戻り、市議・県議を務めた。出張の折には花街へお連れ頂いた。共に県政を語りあえる嬉しさは格別だった。満を持して市長選へ。卓越した力量でたちまち九州市長会のリーダーになる。平和祈念式典で核廃絶を訴える精悍な顔は、あの頃と変わっていないかつた。

4期目の選挙も無風。6月には全国市長会会長就任が内定していた。平成19年4月17日、遊説を終えた直後、暴力団員に背後から撃たれた！無念の死に言葉を失つた。同年7月末、私は市長になる。親分に背中を押されたように思えた。

翌年2月長崎に向かつた。長崎湾を見下ろす崖の上に建つ家は、小さく質素だった。遺影に涙し、大きな人格との出会いに感謝した。外は、澄み切つた空の青と海の碧が目眩しかつた。スズキ、あのなあ……懐かしい声が聞こえてきた。